

特別支援学級における個別の指導計画を活用した 教師と保護者との連携の検討

A study on Cooperation with Teachers and Parents using Individual Teaching
Plan at Special Support Classes

福田大治*・松本和久*・坂本 裕**

Daiji FUKUTA, Kazuhisa MATSUMOTO and Yutaka SAKAMOTO

はじめに

我が国においては、小・中学校の約6割以上の学校において「個別の指導計画」が作成され、保護者との連携のもと、個々の児童生徒の教育的ニーズに対応する特別支援教育が推進されている(文部科学省, 2007)。しかし、坂本・三宅・松原(2008)は、小・中学校における教師と保護者などとの連携の実態調査を行い、保護者の「個別の指導計画」などへの更なる参画が求められているとしている。また、干川(2004)は保護者との意見の食い違いを防ぐために、アクションプランを我が国に導入することの必要性を指摘している。

本稿では、こうした状況を踏まえ、教師と保護者との連携の方法として、「個別の指導計画」の検討・作成・実施に、アクションプランの一つであるPATHの技法を取り入れた実践を報告し、検討を加える。PATHはカナダのInclusion Press International のJack PearpointとMarsha Forestによって作成されたアクションプランのひとつであり、課題を明確にし、それに向けて話し合いをし、問題を解決していく課題解決型の方略である。障害者本人とそれにかかわる多くの人と一緒に会し、その人の夢や希望に基づきゴールを設定し、そのゴール達成のための作戦会議となる(干川・肥後, 2000, 齊藤, 2004)。

* 岐阜大学教育学部附属中学校

** 岐阜大学大学院教育学研究科

方法

1 対象

A中学校知的障害特別支援学級(生徒21名在籍)。個別の指導計画の書式を図1に示す(岐阜大学教育学部附属中学校, 2007)。

2 期間

平成x年4月～平成x+1年3月

3 方法

PATHの図2に示した7つのステップを配慮し、本学級の実態に合わせ表1に示したような年間計画を組み、個別の指導計画の検討・作成・実践を行う。そして、年間計画の遂行状況および保護者のコメントを記録し、分析する。

結果

1 年間計画の遂行

実際の運用においては、表1のように、第1ステップ(幸せの一番星「夢や希望について語ること」)と第2ステップ(ゴール設定する・感じる)を家庭訪問で行った。そして、第3ステップ(いまに根ざすこと「どこに私/私たちはいるのか」)と第4ステップ(夢をかなえるために誰を必要とするか)、第5ステップ(必要な力「どんな力を増したらいいか」)、第6ステップ(近い将来の行動を図示する)を連絡帳などで行った。さらに、第7ステップ(はじめの一步を踏み出す)を日常の授業の中で、と3つの大きな枠組みとなった。

「個別の指導計画」〈平成×年度年間計画〉
 ()年度入学 ()年生 生徒氏名 ()
 記入者氏名()

A 中学校 養護学級

将来の自立や社会参加の姿

中学校の段階で目指す姿(長期の目標)

今年度の段階で目指す姿

| 項目 | 年度初めの姿 | 年間の目標 | 手立て | 年度末の評価 |
|---|--------|-------|-----|--------|
| 生活面 (食生活・食事・排泄・清潔・清潔・物の管理・スクリーン・スクリーン・スクリーン・スクリーン・その他) | | | | |
| 運動・身体面 (運動状態・全身運動・手足の動作・運動能力・持久力・耐久力・その他) | | | | |
| 社会性・コミュニケーション面 (対人関係・集団参加・参加・参加・参加・参加・参加・参加・参加・その他) | | | | |
| 学習面 (基礎的な読書能力・ことば・かず・算・算・算・算・その他) | | | | |

※本年度特に大切にしたい目標に「◎」印

「個別の指導計画」〈平成×年度前期(後期)〉
 ()年度入学 ()年生 生徒氏名 ()
 記入者氏名()

A 中学校 養護学級

| | 今学期の目標 | 手立て | 日常生活の様子 |
|--------|--------|-----|---------|
| 日常生活 | | | |
| 学習の様子 | | | |
| 国語 | | | |
| 数学 | | | |
| 音楽 | | | |
| 美術 | | | |
| 保健体育 | | | |
| 英語 | | | |
| 生活単元学習 | | | |
| 作業学習 | | | |
| 総合的な学習 | | | |

図1 A中学校特別支援学級 個別の指導計画 (一部抜粋)

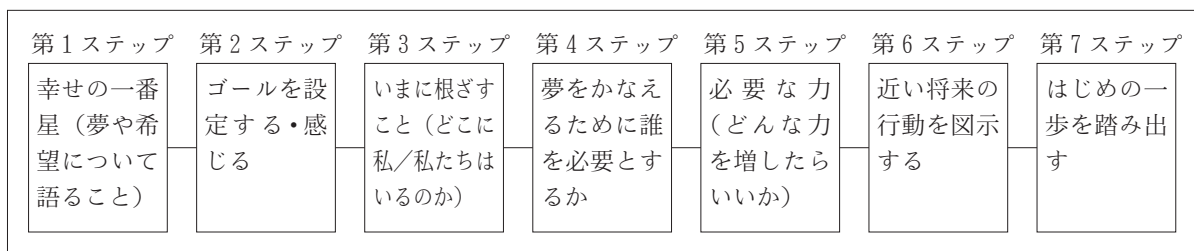


図2 PATHの手順(齊藤, 2004より)

表1 PATHの手順を導入した「個別の指導計画」年間計画

| PATH | 時期 | 場面 | 内容 |
|------|-----|------|---|
| 1 | 4月 | 家庭訪問 | ・「将来目指す姿」「中学校卒業時に目指す姿」の、保護者と学級担任での共通理解。 |
| 2 | 4月 | 連絡帳等 | ・「今年度目指す姿」を決め、その達成に向けて、一年間を通して家庭と学校で一緒に取り組むことを共通理解し、それを踏まえ「個別の指導計画」年間計画を作成。 |
| 3 | 4月 | | ・以上を踏まえ、各教科等の目標と手立てを考え、「個別の指導計画」前期分を作成。 |
| 4 | 5月 | | (前期の取組) |
| 5 | 7月 | 個人懇談 | ・「今年度目指す姿」に向けた生徒の姿や授業での様子を交流。夏休みの課題を決定。 |
| 6 | 10月 | 通知表 | ・前期の学習の様子の連絡と、後期へ向けての意見の収集。 |
| 7 | 10月 | | ・保護者の意見を基に、「個別の指導計画」後期分を作成。 |
| 8 | 12月 | 個別懇談 | ・「今年度目指す姿」に向けた生徒の姿や授業での様子を交流。冬休みの課題を決定。 |
| 9 | 3月 | 通知表 | ・後期及び一年間の生徒の様子の連絡。 |

第1ならびに第2ステップの実施では、一年間の起点となるため『「保護者と学校のより密な連携」のために、個別の指導計画を基に長期的な見通しをもち、保護者とともに一年間取り組みたい。』という意図を話し、家庭訪問で1時間程かけて行った。

さらにその後、第3から第6ステップを踏むことで現段階で何に取り組んでいったらよいかを容易に考えることができた。

後期は、第3から第7ステップまでをもう一度繰り返したが、前期の第1ならびに第2ステップを踏まえての取組だったので、前期につながり一貫した指導をすることができた。

2 保護者の状況

日々の連絡帳を介しての、また、個人懇談においての担任とのやりとりでは、従来は教科や授業内容の達成度が中心になりがちであった。今回の取組ではこれに加え、「今までは一日一日が精一杯だったけれど、今回の取組を通して、我が子の将来について考えることができた」とのある保護者のコメントがなされるほど、将来の自立や社会参加につながる力がついてきたかどうかという視点で子どもの成長を保護者と教師で確認することができた。また、「毎日の生活の中で、子どもが将来どうやって生きていけるのか、今何をしたらよいのか、何ができるのかと思いがつきません」という保護者の日々の葛藤に対しても、「将来目指す姿」やそこにつながる「今年度目指す姿」をもとに成長している姿を示し、日々の取組により確実に力をつけていることを話し、安心してもらうことができた。

そして、前期終了時のコメントの中には、子どもの成長を喜ぶ声だけでなく、家庭での取組についての成果を振り返ったり、今年度の目指す姿をもとに家庭で取り組みたいことの提案などが多くみられたりした。

さらに、学年末懇談会では、今年度取り組んで個別の指導計画の検討・作成・実践について、保護者から「学校での子どもの様子がよく分かるようになった」「以前の個別の指導計画よりも分かりやすい」などの感想が述べられた。

まとめ

個別の指導計画の検討・作成・実施に、PATHの技法を本学級の実態に合わせ活用したことで、保護者とのより綿密な連携を実現することが可能となった。このことは、竹林地(2008)が指摘する『教師・保護者が「目標の共有」「貢献意欲の高まり」「コミュニケーションの深化」という3要件を満たした「子どもを育てるチーム」になる』ことの具現化の営みであったとも言えよう。

○ 効果・利点の検討

齊藤(2004)が示した個別の指導計画にPATHの導入で期待されるとした4つの効果に沿い

ながら、以下、その利点に検討を加える。

① 長期的視野での目標の明確化

第1と第2ステップで、「将来目指す姿」を最初に共有し、それをもとに「中学校卒業時に目指す姿」を決め、第3ステップ以降で「今年度目指す姿」を決めていったことは、「将来目指す姿」という長期的視野に立ってそれぞれの目標を明らかにしていくことにつながった。また、保護者も担任も基本的にもっている「子どもの将来の自立や社会参加を望む」という共通の子どもへの願いのもとに、今の目標を決めていくことができ、共感を得られやすかったと考える。

② 現段階での取組の明確化

7ステップを踏んで現段階の取組を導き出すことにより、保護者にとっても取組の意義や見通しがつかみやすくなったようであった。そのため、保護者も取組に対する必然性を強く感じることができ、家庭での取組も着実なものになったと思われる。

③ 計画の一貫性、継続性

保護者と教師で年度当初に長期的視野に立って目標を決め、それをもとに取組を行った。そのため、保護者と教師の間に子どもへの願いにいくらか相違があったとしても、最終的に長期的視野に立った目標に戻ることができ、取組に一貫性をもたせることができた。また、長い視点で子どもの成長についてとらえることで、変化が明らかになり取組の成果を保護者も感じることができ、継続させていく意欲を強くすることができたと考える。

④ 協力関係の構築

第6ステップで、長期的視野での目標と現段階での取組の関係を図示しながら個別の指導計画を作成したことで、学校や家庭で行う取組内容の重要性が理解しやすくなり、保護者との協力関係を構築しやすくなったようであった。

○ 今後の可能性

個別の指導計画にPATHを導入したことにより、上述したような優れた取組ができたのは、その内容を十分に配慮して、各ステップを行う時期を家庭訪問や個人懇談などの学校の行事とかかわらせながら設定を行ったことも大きな要因になったと思われる。

今後はさらにPATHの基本理念を重視しながら、「個別の指導計画」,そして、更なる保護者との継続的な連携が必須となる「個別の教育支援計画」についても検討を加えていきたい。

付記

本研究は日本特殊教育学会第46回大会(2008年9月,米子市)でその一部を発表した。

文 献

岐阜大学教育学部附属中学校(2007)研究報告,101-112.

干川 隆・肥後祥治(2000)パートナーシップの原動力としての夢:カナダにおけるMAPSとPATHの紹介.国立特殊教育総合研究所,障害児教育分野における協力・連携関係(パートナーシップ)の

形成に関する調査研究,44-50.

干川 隆(2004)個別の指導計画作成とそれを支えるためのシステム.国立特殊教育総合研究所,知的障害のある子どもの担任教師と関係者との協力関係推進に関する研究,10-13.

文部科学省(2007)平成19年度特別支援教育体制整備状況調査結果.

齊藤宇開(2004)協力関係の推進-PATHの技法.国立特殊教育総合研究所,知的障害のある子どもの担任教師と関係者との協力関係推進に関する研究,36

坂本 裕・三宅万里・松原勝己(2008)小・中学校における特別支援教育推進のための保護者及び関係諸機関との連携に関する調査研究.国立青少年教育振興機構研究紀要,8,215-219.

竹林地 毅(2008)作って元気になる「個別の指導計画」をめざして.特別支援教育研究,609,6-11.